



TITLE:

黄巾の亂の政治的側面：主として宦官との關係からみて

AUTHOR(S):

松崎, つね子

CITATION:

松崎, つね子. 黄巾の亂の政治的側面：主として宦官との關係からみて.
東洋史研究 1974, 32(4): 435-454

ISSUE DATE:

1974-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153531>

RIGHT:

東洋史研究

第三十二卷第四號 昭和四十九年三月 發行

黄巾の亂の政治的側面

——主として宦官との關係からみて——

松 崎 つ ね 子

はじめに

黄巾の亂については、從來、主としてその宗教的視點から、また農民反亂という視點から論じられてきた。^①こうした傾向に新しい視點を示したのが川勝義雄氏の近年來の諸論文である。^②その内の「後漢末のレジスタンス運動」で、同氏は後漢末の黨錮事件から黄巾の亂までを一大レジスタンス運動と規定し、前者を後漢政府に對する知識人の、後者を農民の、レジスタンス運動と位置づけ、両者はそれぞれ儒教的共同體、道教的共同體の創設をめざして戦ったもので、したがってこの二つの運動はともに共同體翼求運動であった。その故に両者は互いに親近感があり、場合によっては「連繫がおこらないとも限らない」^③關係にあったとしている。

同氏が二つの運動に連繫關係が成立したかもしれないとするのは、氏が兩者ともに後漢政府に抵抗する二つの勢力とみたからであらう。私がこの視點に同調できないことは本文でのべるが、黄巾の亂を農民運動・宗教運動としての面にのみ重點を置くのではなく、後漢の全政局の中に位置づけ、後代への展望のもとに論じられているその姿勢には多く學びたいと思つてゐる。私がこの亂で強く感ずることの一つに、その政治的側面があり、當時政局の中心にいた宦官との繋がりは、とくにその感を深くさせる。從來、黄巾と宦官との繋がりは深く論じられてこなかったが、史料によるかぎり、川勝氏がのべるような知識人層との繋がりにより、より明確に宦官との繋がりを記しているのである。ただ皇帝側近としての宦官と農民という兩極端にあるものの繋がりであるので、それをどう考えるかということになる。

またさらに、川勝氏の知識人運動と黄巾運動との連繫の可能性については同調できないとのべたが、その點について少しふれると、從來の論が、それ以前の時代との關連において、あるいはそれ以前の諸事象、例えば社會の荒廢・民族的宗教の成立等、の結果として黄巾の亂を位置づけているのに對し、川勝氏は「後漢末のレジスタンス運動」の中で果した知識人の役割を高く評價し、三國以降成立する貴族制への繋がりを強く意識して論じてゐる。したがって兩者の間には後漢末の政局について、前者には知識人＝士大夫運動の結果としての黨錮事件が、後者には黄巾運動を擔った農民が、それぞれ影の薄いものとなつてくる。川勝氏のようにそれがもつた次代への意味づけということも、歴史を論ずる場合の要件であらうが、同氏の論の展開によると、それがすべて知識人運動の中に括られてしまつてゐるようで、どうも釋然としないのである。壯大に戦われ、そして敢然と歴史の中に姿を消してしまつた黄巾の亂に、私は、なぜといわれて、それに答える用意はないが、やはり前代の終焉という點に力點を置いてみたいのである。川勝氏の結論は、結局知識人のもつ社會的使命感が、黄巾を彈壓する側にまわらせたとなるのであるが、私には、もともとそうだったのであつて、連繫の可能性などはじめからなかったのではないかと思えるのである。⑥ 以上のような觀點から、以降論じてゆきたいと思う。

漆俠・多田氏がそれぞれ後漢の反亂を時代順に整理しているが、それによると黄巾の亂が勃發する一八四年（中平元年）直前はその頻度が少し落ちてゐる。^⑧これは黄巾の首謀者張角が、「弟子八人を遣りて四方に使わし、善道を以て天下を教化し、轉た相誑惑せしむ。十餘年の間に衆徒數十萬」（後漢書列傳卷六一 皇甫嵩傳）というような傳教活動を行ない、「而して潛かに相連結し、黃天泰平と自稱」（三國志卷四六 孫堅傳）していたごとく關係してゐよう。というのは、亂直前の反亂の小康状態はあるいは各地のそうした動きと結びついて、來るべき蜂起の日を期して大同團結していたからではないのか。でなければ「郡國を連結し、青より徐・幽・冀・荆・楊・兗・豫の八州之人、畢く應ぜざるもの莫し」（前出皇甫嵩傳）といった廣範圍にわたる一齊蜂起は考えられない。この推測を更に強くさせるのは、黄巾の蜂起で堰が切れたように、黄巾以外の蜂起が各地にひんびんと起こっているからである。^⑨とするとこの運動は、單に貧窮した農民の追いつめられての蜂起という面ばかりではない、政治的プログラムをもつて準備された面もあったのではないだろうか。もちろん黄巾の主体となつた太平教教團が、わずか十數年の間に何十萬という信徒を獲得したという事實から、これを「狂妄」^{オンジ}による信徒の急速な擴大とか、江戸末期の「ええじゃないか」のような、民俗的宗教信仰によるマス・ヒステリアによるものとか見る論もあり、たしかに「黄巾の帥張角等左道を執り、大賢を稱し、以て百姓を誑耀し、天下纏負して之に歸し」（後漢書列傳卷四四 楊賜傳）、「或いは財産を棄賣し、流移奔赴し、道路を壊め塞ぎ、未だ至らずして病死する者、亦萬を以て數え」（資治通鑑 光和六年の條）、「時に鉅鹿の張角、大道に僞託して小民を妖惑す」（同列傳卷四七 劉陶傳）といったような情況、且に切に刺史・二千石に勅して、流人を簡別し、各々護りて本郡に歸らしめ、以て其の黨を孤弱にせんと欲すべし。然る後に其の渠帥を誅せば、勞せずして定む可し」（前出楊賜傳）と上書させているような、この集團の在り方は、その宗教的

呪術性^⑩とともに、そうした見方を成り立たせるものであり、黄巾大衆の底邊を支えた部分はこうした形で集まったものも多かったであろう。

しかし他方で冷厳な政治的プログラムをもって準備された面があったのではないだろうか。さきの楊賜の上書はとりあげるところとはならなかったが、事態を重くみたもと司徒楊賜の掾であった劉陶が、亂の前年また、「今、張角の支黨勝て計う可からず。前に司徒楊賜『詔書を下して切に州郡に敕し、流民を護送せん』と奏す。會々賜、位を去り、復た捕録せず。赦令に會うと雖も謀りて解散せず。四方私かに言うに、『角等、竊かに京師に入りて朝政を覬視すると云う』と。鳥聲獸心、私かに共に鳴き呼う。州郡忌諱して之を聞くを欲せず、但だ更に相告語するのみ。肯えて公文するもの莫し。宜しく明詔を下して角等を重募し、賞するに國土を以てし、敢えて回避するもの有らば、之と罪を同じうすべし」(前出劉陶傳)と上疏している。この上疏は黄巾の大方、馬元義が「數々京師に往來し、中常侍封諶・徐奉等を以て内應を爲し、約すに三月五日を以て内外俱に起たんと」(皇甫嵩傳)した事實と裏腹の關係にある。また地方の官僚が事實を直視して適切な對處をしたがらなかったということは、官僚制の常ともいえるように、『資治通鑑』でいつているように、「郡縣、其意を解せず、反って『角、善道を以て教化し、民の歸する所と爲る』と言う」(光和六年の條)ということなにかもしれない。またそうした中にも、黄巾の勢力が及んでいたということは充分考えられる。

黄巾の側の周到な政治活動ということを更に強く感じさせるのは、宦官とのかかわりである。黄巾蜂起の發覺は張角の弟子唐周の裏切りによる密告からで、これによって宮中の内應者封諶・徐奉等の名も發覺したのであるが、この宦官と黄巾との繋がりについて大淵氏は、「宦官はもと微賤の出身が普通であるから、下層庶民の間に流布した教法を受容した者があつたとしても、必ずしも不自然とはいえないが、しかし彼等は天子の權威に依附することによって權力と利益をうることができるに過ぎないのであるから、漢朝打倒に力を借すということは、既に漢朝に見切りをつけたものであつたかもしれない^⑪」とのべている。もちろん微賤からの出身が多い宦官の中から、個人として黄巾同調者が出たとしても、それは

あり得ることである。しかし私には、宦官が黃巾と關係したについては漢朝打倒に力を貸したというより、彼等なりの體制維持を劃策した一つの方向だったのではないかと思える。以下こうしたことについてのべてゆきたい。

黃巾と宦官との繋がりを宦官側においてさかのぼってゆくと、「時に中常侍張讓の權、天下を傾く」(後漢書列傳卷五二・陳寔傳)といわれ、また靈帝から常に「張常侍は是れ我が父なり」(同宦者列傳卷六六・張讓傳)といわれていた靈帝側近第一號ともいえる張讓にゆきつく。このことは、以下のべる宦官と黃巾とかかわりのあったほとんどすべてのことに張讓が關係していることで證明される。黃巾討伐にあたつた王允が、黃巾討伐ではそれぞれ第一位の功績をあげた皇甫嵩・朱儁と黃巾の降者數十萬を受入れた時、「賊中に於いて中常侍張讓が賓客の書疏の黃巾と交通せるを得、允、具に其の姦を發き狀を以て聞」(同列傳卷五六・王允傳)したという事實、また中常侍封誥・徐奉の事が發覺したあと、常に「汝が曹、常に『黨人不軌を爲さんと欲す』と言う。皆、禁錮せしめ或いは誅に伏せしもの有り。今、黨人更々國の用を爲し、汝が曹、反つて張角と通ず。斬る可しと爲すや、未だしや」と難詰された時、彼等は叩頭して「故の中常侍王甫・候覽の爲す所なり」と逃げている。今は亡き大官であつた宦官の名をあげて辯解しているということは、事實無根のこととして言い逃れることができない事實があつてのことであろう。宦者列傳に「讓等實に多く張角と交通す」(以上前出張讓傳)と書かれている。こうして張讓等は不問に付され、事は封誥・徐奉のところまで食い止められてしまった。このように宮廷奥深くまで黃巾の勢力が浸透していたことと、劉陶がいった「朝政をうかがっている」ということはまさに表裏の關係にあらう。楊賜・劉陶らはこうした事實をつかんでいたからこそ、前述のような上奏をしたのであらう。

こうした推測を更に強めさせるのは、その後のこの事件の展開である。劉陶はその後また「崩亂を致すを憂いて」、「天下の大亂は皆宦官に由れり」と上疏したため、宦官に逆に「今者四方安靜なり。而るに陶、聖政を疾害し、専ら妖孽を言う。州郡上せざるに、陶、何に緣りてか知れる。疑うらくは陶、賊と情を通ずるならん」と讒言されて、「朝廷前に臣を封ずと云うは何ぞ。今、反つて邪譖を受く」と恨みをのんで「氣を閉じて死」(以上前出劉陶傳)ぬに至り、また黃巾の亂

が起こつてから、「竊かに惟うに、張角が能く兵を興し亂を作す所以、萬人の附くを樂しむ所以は、其の源は皆、十常侍が多く父兄・子弟・婚親・賓客を放ちて州郡に典據せしめ、財利を辜奪し、百姓を侵掠し、百姓の冤、告訴する所無きによる。故に不軌を謀議し、聚りて盜賊を爲す。宜しく十常侍を斬りて……以て百姓に謝せば……大寇自ら消ゆべし」と上書した郎中張鈞は、「御史、讓等が旨を承けて遂に『鈞、黃巾の道を學びたり』と誣奏し、收えて獄中に掠死」(前出張讓傳)させている。また前述した張讓の賓客と黃巾との往來書簡のことをあばいた王允も、「讓、忿怨を懷挾し、事を以て允を中(傷)す。明年遂に傳(逮)われて獄に下」(前出王允傳)されている。

以上みてきたように、おそらく支配階層として黃巾の情況を憂慮して情報の収集にあたっているうちに、宮廷内の宦官等と黃巾との關係をつかんだ楊賜・劉陶、實際の戦闘の中でその證據をつかんだ王允、黃巾の亂の原因は「十常侍」にあると書した張鈞等、中平元年黃巾の反亂によってその責を受けて職を免ぜられ、翌年亡くなった楊賜を除くすべてが、逆に黃巾との繋がりやデッチ上げられて獄死ないし投獄されている。彼等は反亂という重大な危機に直面した時の支配層として、充分適切な行動・言論をなした人物であり、ましてその中にはその功によっていったんは「封侯」された人物までいるのである。そしてこれ等の三人の「罪」のうち、後二者は完全に張讓がかかわっている。これは張讓が黃巾と通じた事實があったからこそ、情報・證據をつかんでいる者を抹殺する必要があったということのあらわれではないだろうか。

こうしたことで、やはり張讓がからんだつぎのような事件があった。向栩は辟微にはすべて應じなかったが、のちに特に徴されて侍中になった時、「張角の亂を作すに會い、栩、便宜を上って、頗る左右を譏刺り、國家の兵を興すを欲せず、但だ將を遣りて河上に於いて北に向いて孝經を讀めば、賊自ら當に消滅すべし」とのべて、張讓に「栩、國家をして將に命じて師を出さしむるを欲せず。疑うらくは角と心を同じくして、内應を爲さんと欲」(後漢書獨行列傳卷七一 向栩傳)しているとされてやはり獄で殺されている。向栩は後漢書列傳の中で、太平教信者ないしシンパと目されるほとんど唯一の人物であり、引用の部分だけでもわかるとおり、嫌疑をかけられても仕方のないような情況にあるが、彼の場合も張讓

であった。この場合は、張讓と黃巾との關係を、組織内の人間かもしれない向栩によってあばかれることを恐れたのではないだろうか。いずれにしろ、この當時朝廷内で黃巾の情報に通じていそうな者のはとんどが張讓によって葬り去られている。そして向栩を除くすべてが、その言論・行動からして黃巾同調者とは考えられないところからみて、さきの推測を助けるものである。

これまで黃巾と張讓との關係について推測してきたが、張讓がさきにもべたとおり當時靈帝側近第一號ともいえる位置にいたということを考えると、これは彼が單に個人としての太平教信者として、黃巾にかかわったなどということは到底考えられない。ここに前掲の楊賜・劉陶等の發言、また黃巾の大方、馬元義と中常侍封諱・徐奉らとの關係が裏付けをもったものとして浮び上がってくる。黃巾の宮廷内への浸透の規模の大きさ、大膽さは、さきにもべたとおり、馬元義と宮廷内の宦官とが内外呼應して起たんとしたという事實だけでも推測できるが、そのうえにそれが事前に洩れて馬元義が洛陽で車裂の刑に處された時、同時に「宮省の直衛及び百姓の角が道に事うる有る者を案驗して千餘人を誅殺」したというが、「宮省の直衛」で「角が道に事える者」があったということは、宮廷内における張讓を頂點とする樞野の廣がりを感じさせる。また宮廷の外においては、「白土を以て京城の寺門及び州郡の官府に書くに皆『甲子』の字を作し」た黃巾の洛陽や地方都市での工作活動は、「甲子」の年（中平元年）には何事か起こるぞといった豫言で人心に動搖を與える目的でなされたものであったとともに、各都市の黃巾シンパに蜂起を促す合圖でもあったろう。こうした行動が首都でさえも可能であったということは、洛陽の街にも多くの支持者がいたことを示しているとともに、内外呼應してのクーデター計劃が現實的な意味をもっていたといってもよからう。この時張角は鉅鹿にいたのに、「角等、事已に露われたるを知り、晨夜馳せて諸方に敕し、一時に俱に起たしむ。皆、黃巾を著けて標幟と爲し」（以上前出皇甫嵩傳）たというのであるから、彼等の連絡網の整備がゆきとどいていたこと、洛陽における確固とした情報源の存在を示すものであろう。

それにしても自分の身近で起きたこうした事件に、靈帝がどういう態度で臨んだかということである。前述したよう

に、劉陶にはその先見の明を評價して、「封侯」しながら、宦官の言を納れて罪にするとといった態度のあいまいさが指摘されるし、また張鈞の時も鈞を「此れ眞に狂子なり」と怒り、それでいてのちに張讓等宦官と黃巾とのかわりが發覺した時、張讓に、それは王甫・侯覽がしたことと辯解されて「帝乃ち止」（前出張讓傳）めて、なんら咎なしに終った。王允の場合も「靈帝、讓を責め怒る。讓、叩頭陳謝す。竟に之に罪する能わ」（前出王允傳）なかったのである。直言した者の運命のきびしさと大變な對照をなしている。これは靈帝が少くとも、その事實は知っていたということ、本當の意志はどうあれ、もはや靈帝が宦官と離れては存在し得なかったことを示している。

このように黃巾と宦官＝宮廷との繋がりの一方の頂上に張角が、もう一方の頂上に張讓がいたといえるのではない。ただここでことわっておくが、私はここで何も黃巾と宦官との間に連繋の可能性があったのでは、などということを論證したために兩者の關係についてのべてきたのではない。宦官の側の動きを明らかにしている史料が、逆に黃巾の側の政治的動きの輪郭を映し出していることを明らかにしたいためである。そしてこれらのことの結論としていえることは、「宦官が漢朝を見ようとする」のでもないかぎり、黃巾との連繋關係はあり得ない。しかし、皇帝に寄生しなければ存在しつづけられないという宦官の性格や、これまでのべてきた張讓の行動が、黃巾と關係したことを否定してゆこうとするところから出てきたとみられること、またのちにのべるように、その後どこまでも朝廷内にあって延命策を劃策しつづけた張讓等の動き方からいって、それこそそうしたこととは考えられない。とすればこうした事態は何を意味するのか。私は張讓らに誤算、あるいは錯覺があったのだと思う。彼等が皇帝の寄生者として體制の維持を意圖するかぎり、「蒼天已に死し、黃天當に立つべし、歲は甲子に在り、天下大吉なり」（前出皇甫嵩傳）と、明確に體制の變革を打ち出すに至る黃巾と組めるわけがないのである。このことがわかった時、彼等が黃巾に近ずいた事實を必死にもみ消そうとしたのが、これまでのべてきた宦官の行動だったのではないだろうか。

黃巾の側にとっては、體制の變革、即ち政權の奪取を意圖したわけであるから、正攻法としての反亂行動とともに、宮

廷内の勢力と結びついて、種々劃策することは、彼等の政治の論理として當然の行爲であろう。では宦官の有力層をしてこのような行動をとらせた動機はどこにあったのであろうか。

二

後漢後半の政權行使が宦官・外戚のシーソーゲームによつたことはつとに知られている。しかし兩者による政權交替といつても、時代によつてその内容を異にしているのも、また當然のことであつて、當面ここで問題になる桓帝の時の竇氏以降についてみてみよう。桓帝の時、竇氏が外戚の地位についたのには、つぎのような事情があつた。即ち「初め桓帝幸する所の田貴人を立てて皇后と爲さんと欲す。(陳)蕃、田氏卑微、竇族良家なるを以て、之と争うこと甚だ固し。帝、已むを得ず乃ち竇后を立」てたのである。したがつて竇后が永康元年(一六七)桓帝の崩御によつて臨朝するに及び、陳蕃を太傅に任じ「用を蕃に委」ねたのは當然のことであり、そこから同じくこの時大將軍に任じられた後の父竇武と「心を同じくし力を盡して名賢を徵用し、共に政事に參ず」(以上後漢書列傳卷五六 陳蕃傳)という、當時、清流勢力のトップにいた陳蕃と竇武との深いかかわりが生じ、「常に宦官を誅翦するの意有」つた竇武と、「太傅陳蕃も亦素より謀有り」、ここに二人は共に宦官誅滅を心に秘めて協力し合うことになる。このような重大な計劃を實行しようというのに、それが實際の行動に移されようとしたのは、彼等が實權を握つてから八カ月ものちのことであつた。この間「是に於いて天下の雄俊、其の風旨を知りて、頸を延べ踵を企げて其の智力を奮うを思わざるもの莫し」というのであるから、陳蕃等の意圖がもう公然となつていたといつてよい。このため逆に宦官等の反撃を呼び起こして、第二回黨錮をひき起こさせてしまう。こういう結果を招いたのは、無駄に費やされた八カ月の間、陳蕃がたびたび計劃の實行を竇武に迫つたにも拘らず、いつも土壇場で、竇武が優柔不斷であつたためである。しかしこれは竇武が太后に、宦官を「宜しく悉く誅廢し、以て朝廷を清くすべし」と決行の承認を求めた時、「漢來故事、世々中官有り、但だ當に其の罪有るを誅すべきのみ。豈に盡く廢す

可けんや」といった太后の態度がさせたのである。そしてこの時「凶賢、志を得、士大夫、皆其の氣を喪」（以上同列傳卷五九 竇武傳）だったのである。

つぎに靈帝の時の外戚何氏についてみると、何后が位についたのは、「肅宗（章帝）の宋貴人の從曾孫」であつた宋后が、中常侍王甫らに「皇后、左道を挾て祝祀せり」（同皇后紀卷十下 宋皇后紀）と陥れられたことによつた。時は黃巾の亂に先立つこと四年の光和三年（一七九）、「家は本屠者」（前同 何皇后紀）であり、何氏の筆頭者何進は「自ら羊を屠」してゐた。したがつて何氏が外戚の地位についたのは竇氏のように家柄が背景になつたのではなく、「中常侍郭勝は進と同郡の人也。（何）太后及び進の貴幸は勝の力、有」つたからで、宦官の後押しが力になつたのである。こうしたことはその後一貫していたのであつて、のちに何進が宦官誅滅の主謀者として張讓に殺される時に、「先帝嘗て太后と快からず、幾んど成敗に至らんとするや、我が曹涕泣して救解し、各々家財千萬を出して禮と爲し、上の意を和悦せり。但だ卿が門戸に託せんと欲すればなるのみ」となじられてゐる。そのうえ張讓と何氏とは姻戚關係も結んでいたので、「張讓の子婦は太后の妹」であつた。「進の謀、日を積みて頗る泄れ、中官懼れて變を思ふ。……讓、子婦に向つて叩頭して」太后へのとりなしを頼んでゐる。宦官が竇武の時の轍を踏むまいと、外戚を自己の翼下に置き、かつ意識的に自己の勢力の一翼たらしめようと養つたことがわかる。とすれば宋后を陥れて何后に替へたことも偶然とはいへまい。宦官にとつてそうした外戚は微賤の出の方がよかつたであらう。

こうした宦官の意向に、何進を除く何氏一族が充分に添うものであつたことは、つぎのような例でわかる。のちに何進が袁紹とともに宦官誅滅の謀をなさんとした時、太后が「中官の禁省を統領するは古より今に及ぶまで漢家の故事、廢す可からず」として許さず、そのうえ「太后の母、舞陽君及び苗（進の弟）數々諸宦官の賂遣を受け、進が之を誅せんと欲すを知りて、數々太后に白して其が障礙と爲り」、また舞陽君らが「大將軍（何進）専ら左右を殺し、權を擅にして以て社稷を弱めんと」していると太后に訴え、太后も「然りなり」とそれに答え、また何苗も進に「始め共に南陽従り來るや、

俱に以て貧賤なりしが、省内に依りて、以て貴富を致せり。國家の事、亦何ぞ容易ならん。覆水は收む可からず。宜しく深く之を思いて、且く省内と和すべし」と翻意を迫った、等のようにである。

何進が袁紹と組んで宦官誅滅の意志を固めたのは、靈帝が崩じ（中平六年）、何后の子、辯（のち弘農王におとされる）を帝に擁して權力を握ってからである。ところが、まさにこの時を見越しての行爲が宦官の何氏育成策であったのであるから、進の行爲が宦官に裏切りとうつつたのは當然のことであった。ともあれこうしたことを背景に何進が從來の宦官との關係から抜けだそうと考えたのは、「進、素より中官、天下の疾む所となるを知」っていたからであり、このままゆけば宦官の道連れにされかねないという深刻な現狀分析があつたからであらう。また天下の權を握るという立場に立つた時、その誇りが、當時の社會を蔽つていた儒教的道德觀からいつて否定さるべき宦官と、これ以上結びつきをつづけることは否定したかつたであらう。竇武が當時の士大夫社會から三君の筆頭にランクされた、そうした立場を何進が希んだとして、それはこれからのべる袁紹との結びつき方からみて、充分あり得ることである。進のこうした現狀認識が「朝政を乗るに及んで陰かに之を誅せんと規る。袁紹も亦、素より謀有り」、ここに竇武と陳蕃のような關係が袁紹との間に生じることになる。何進が袁紹と結びついたのは、「袁氏が果世寵貴せられ、海内の歸する所、而して紹、素より善く士を養ひ、能く豪傑の用を得」ていたからであり、また「其の從弟、虎賁中郎將（袁）術も亦氣俠を尙ぶ。故に並に之を厚く待し、因つて復た博く智謀之士、龐紀・何顒・荀攸を徵し、與に腹心を同じく」（以上同列傳卷五九 何進傳）したのである。

何進は宦官を捨てる替わりに、それに袁紹等をあてようとしたのである。いうなれば政權擔當者として彼等の協力を得ようと、あるいは利用しようとしたのであらう。とも角、ここに袁紹を頂點とする反宦官勢力と、何進との結びつきが始まる。これはまさに反宦官勢力として竇武と陳蕃を頭に置いた清流勢力の形成といった、前述のパターンの再編のようであるが、それがそうはいかなかったことは、これからの経過がものがたっている。竇太后臨朝下では、宦官は第一回黨錮を乗り切つて官廷での勢力をより強めてはいたが、太后を後楯とする竇武も、野に在る清流勢力と結びついてそれなりの

力を貯え、ある時點までは雙方互角にわたりあえる力をもっていた。兩者の天王山が宦官の逆クーデターで、王甫が「出でて朱雀の掖門に屯し、……武と對陳す。甫が兵漸く盛なり、其の士をして大いに武が軍に呼わしめ、曰く『竇武反す、汝皆禁兵なり、當に宮省を宿衛すべきに、何故ぞ反者に隨わんや』と。……是に於いて武が軍、稍々甫に歸す。旦より食時に至るまでに、兵降つて略盡す」(前出竇武傳)というような、兵力の掌握をめぐつての緊迫した場面を経ていることもわかる。もっともこれをきっかけとして宦官は第二回の大々的黨錮を敢行し、政權が全く宦官の手に歸してしまふという事態を生んでしまつたが、ところが前にもみたとうり、何太后臨朝下においては、宦官は太后及び何氏一族に庇護を求めるところにまでできてしまつていた。第二回黨錮を敢行して政權を手中に納めたはずの宦官が、どうしてこのようなほめになったのか。

袁紹は竇武の時の例をもとに、宦官誅滅の即時の決行を迫つて「進に勸むに『便ち此に於いて之を決せよ』と、再三に至る」が、一族の反對と、進も「素より之(宦官)を敬し憚り、外は大名を收むと雖も、内は斷ず能わず、故に事久しく決せず」にいた。そうした進に袁紹は「多く四方の猛將及諸豪傑を召し、並びに兵を引いて京城に向け、以て太后を脅かしめよ」と迫り、更には「紹、又、書を爲り、諸州郡に告ぐるに、進が意を詐り宣べ、中官の親屬を捕案せしめ」たりした。こうして無理矢理、進をして計劃に着手するよう追い込んでゆく。こうしてみてみると、宦官誅滅の計劃は全く袁紹の主導權のもとに進められているといつてよい。外戚としての權威・獨自性を發揮するにしては、その地位があまりにも低下していたのである。陳蕃・竇武の時は、兩者は少くとも同一の運命共同體として終始した。そしてその通りになつてしまつた。しかしこれまでみてきたとうり、危険な計劃をするのに、袁紹の行動には外戚何氏に對する配慮は全くない。宦官の反撃に會うとすれば、最初に、そしてものに受けるのは外戚である。太后をはじめとする何氏一族が宦官擁護派にまわつたのも、從來のしがらみだけでなく、こうしたことに危険を感じてのことであらう。また進の行爲が「社稷を弱めるもの」といつているのは、彼等が外戚としての位置をよく自覺していたからであると同時に、この時期の朝廷の在

り様をよく示している。朝廷とは即ち何氏と宦官であつたので、この二本の互いに支えあう柱の一方をとり除くことは、すべてをなくすことであつた。このことはその後の経過がよく證明している。

以上の経過は、袁紹にとって何氏などどうでもよかつたので、士大夫社會の年來の願望である宦官誅滅の目的を達成するための手段に何進を考えていたにすぎないということになろう。そして宦官・何氏にとっての破局は、「宦官を誅するを以て言と爲す」軍の河内地方にあげた火の手が「城中を照す」という追いつめられた情況の中で、張讓等が何進の首級をあげたことからはじまつた。このことをきっかけに袁紹の宮中侵入、宦官誅滅のことはよく知られている。そして結局残りの何氏一族は、反宦官側の手によって殺され、「何氏遂に亡ぶ。而して漢室も亦此より敗亂し」（以上何進傳）、さきの舞陽君の「社稷を危うくするもの」という心配は現實のものとなつたのである。こうしてみると、朝廷内の對立・争いはすべて現實の社會と全くかけ離れた所でのものではなかつたので、このことは外戚＋宦官＝朝廷の絶對的地盤沈下、皇室の全くの形骸化を示している。

以上のことをもとに、ここで宦官と黃巾という觀點にもどつて、宦官の立場を概観してみよう。第二黨錮で勝利を占めたかにみえた宦官勢は、士階層の政治への非協力という形で離反を深めさせ、現實の社會からますます浮き上つていった。士階層が弾壓されて一見逼塞させられているようでいて、實は着々と實力を蓄えていたことは、これまでのべてきた袁紹勢の動きによつても、また黃巾の亂が起るや、次節でのべるようにその難局を切り抜けるために用いられ、かつ功績のあつた人物のほとんどが、反宦官・非宦官系であつたことでもわかる。そうした社會の底流をひしひしと感じさせられていた宦官が、自己の勢力維持のために外戚を自己の勢力の一翼たらしめようと育成したように、黃巾が太平敎教團として活動し、勢力を伸ばしていた時、それを自分たちの勢力の一つの據り所にしようと近づいたのではないだろうか。

三

これまで宦官と黄巾との關係についてみてきた。では清流系の黄巾に對する態度はどうであらうか。第一節でのべた楊賜・劉陶の黄巾に對する認識が體制側からの見方として實に的確なものであることはすでにのべた。その楊賜がやはり亂直前に、したがって黨禁が全面的に解かれる前に、「廢棄されて幾んど十年」の黄琬を、「揆亂の才あり」（後漢書列傳卷五一 黄琬傳）として用いるよう推舉している。これも前々から張角らの動きに注意を拂っていたことと關係しよう。亂が起きてから靈帝はその對策を問うた。それに對し中常侍呂強は、「黨錮久しく積み、人情怨憤す。若し赦有せずんば、輕々しく張角と謀を合わせ、變を爲すこと滋々大ならん。之を悔ゆとも救う無からん」（同黨錮列傳卷五七 前文）、「先づ左右の貪濁なる者を誅し、黨人を大赦し、刺史・二千石の能否を料簡せんことを欲す」（同宦者列傳卷六八 呂強傳）と答えて、帝から「大いに黨人を赦し」（前出黨錮列傳）、「唯、張角のみ赦さ」（同帝紀卷八 靈帝紀）ないという政策を引出している。呂強の發言内容は、黄巾には支配階級が一致してあたらなければならないことを強く主張したもので、その點黨禁がつづいている時期の發言として非常に思い切ったものであり、内容からいって前述の楊賜・劉陶の發言内容の延長上のものである。ちなみに、この發言が禍いして呂強は當時靈帝から、「趙常侍は是れ我が母」といわれていた趙忠、當時權勢を誇っていた十二常侍のうちナンバー・スリーの夏惲等に「黨人と共に朝臣を議し、數々霍光傳を讀む」と誣いられて、「吾死せば、亂起らん。丈夫、忠を國家に盡さんと欲す、豈に能く獄吏に對せんや」（前出呂強傳）と自殺に迫りこまれている。朝廷側の人間として適切な黄巾對策を講じようとした者が皆罪に陥し入れられたという點では呂強も同じであった。そしてこの場合、ナンバー・ワンの張讓でなく、ツウー、スリーが顔を出しているということでは、前節までののべてきた張讓の個人的行動ではないということを裏付けるものであろう。

また黄巾討伐にあたって第一の功勞者となった皇甫嵩は、やはり帝の問に對して「宜しく黨禁を解き、益々中藏の錢・

西園の厩馬を出し、以て軍士に班つべし」(皇甫嵩傳)と、具體的施策をのべて帝に納れさせている。呂強と同じく皇甫嵩も黨禁を解くことを主張している。黨人側からすれば、まさに巻返しチャンスであつたろう。また時の政府に黨人解放という大きな政策轉換をさせるとともに、私的蓄財に精を出していた靈帝に、中藏錢・厩馬を出させたことは、宦官を含める靈帝側の大變な讓歩である。私はさきに黃巾と宦官の結びつきの可能性の存在を推測した。もしこの推測が許されるなら、それが反亂にまでいつてしまったということは、明るみに出れば時の爲政者にとって二重の失態として糾彈されるべきものである。黃巾の蜂起を期に、黨禁が解かれ、登用された反宦官・非宦官系の人物の活躍が目立つようになり、かわりに皇帝・宦官勢が後退しはじめるのは、彼等の能力では支えきれなくなったということも大きかろうが、こうした彼等の失態が行動の自由を束縛し、ただただ黃巾の情報に通じていそうな者を片端から抹殺して、自分たちの祕密を守ろうとすることに狂奔させたのではないだろうか。川勝氏は前掲の呂強の言は、「黨人が黃巾と合謀する危険を警告した」もので、とにかくその「危惧があつた」とされているが、呂強の發言の力點は、「合謀」の方にあるのではなく、黃巾の亂の重大さを察知して、黨人の解放に人材の確保・協力がなければならないという現状認識の方にあつたのではないのだろうか。その點皇甫嵩の發言も同じであろう。であるからこそ嵩をして「黃巾は細孽なり。敵は秦・項に非ざるなり。新たに結んでは散じ易く、以て業を濟し難し」といわしめたのだと思う。したがって嵩の黃巾に對する態度は峻烈を極め、同列傳の黃巾の記事はまさに屍累々である。ところがそれと對照的に行軍中「士卒を溫卹し、甚だ衆情を得」、また「冀州の一年の田租を以て飢民を贖わす」ことを奏請し、そのため百姓に「天下大いに亂れて、市は墟と爲り、母は子を保てず、妻は夫を失う、皇甫を得るに賴りて、復安居す」(以上皇甫嵩傳)と歌われたという。このコントラストの激しい差は、まさに體制保持を願う強烈な意志から出てくる表裏のあらわれにすぎないのではないか。

嵩について功績のあつた朱儁も、黃巾の投降受入れをめぐる意見が分れた時、「兵には形同じくして執異なる者有り。昔、秦・項の際、民に定主無し。故に附きたるを賞して以て來るを勸めしのみ。今、海内一統し、唯だ黃巾のみ逆を造

す。降を納るとも以て善を勸むる無く、之を討たば以て惡を懲らすに足らん。今、若し之を受けば、更に逆意を開かん。賊は利なれば則ち進み戦い、鈍なれば則ち降を乞う。敵を縱し寇を長ずるは良計に非ざるなり」(同列傳卷六一 朱儁傳)と妥協を許していない。この二人のこうした態度はその後も一貫して變れることがなかった。この點、のちに漢に替わる意志を示したり、群雄への道を歩き出した袁紹・袁術・曹操・公孫瓚などが、黃巾をはじめとするこの時期の反亂勢力と戦ったり、手を結んだりといった行動を繰り返したのとは、はつきりしたちがいをみせている。

以上、楊賜・劉陶・呂強・皇甫嵩・朱儁等の黃巾に對する見解をみてきた。ここで共通していえることは、彼等の黃巾に對する容赦のない敵對的意識であり、このことは同時に強烈的な體制維持意識でもあるということであり、またこれらの人物がすべて清流ないしそれに準ずるものとして分類され得るということである。この中で呂強は宦官であるが、彼の「列傳」に書かれた事績や、前掲の發言内容からいって、思想的には清流系に分類されてよいと思う。少くとも「所謂」宦官の範疇に入れらるべき人物ではない。またほとんどの人物が、その時點に政權の中樞にいなかったということである。楊賜は對策を上書した時、司徒の要職にあったが、それでも彼の意見を政治に反映させることができなかった。呂強は中常侍であったが、その意見が煙たがられて、同じ宦官によって自殺に追いこまれた。このようにみえてくると、當時政治の中樞から排除されていたにかかわらず、彼等の體制維持意識が大變強烈なものであったことがわかる。黃巾の政治的野心に氣が付いていたのは、まさに清流系であったといえよう。

つぎに掲げる例は、地方でもそうした人物の體制維持意識が強固であったことを示している。

黃巾起、縣丞王度反應之、燒倉庫。縣令踰城走、吏民負老幼東奔渠丘山。(程)昱使人偵視度、度等得空城不能守、出城西五六里止屯。昱謂縣中大姓薛房等曰「今度等得城郭不能居、其勢可知。(中略)今何不相率還城而守之？」(下略)房等以爲然。吏民不肯從(中略)、昱謂房等「愚民不可計事」。(中略)大呼言「賊已至」、便下山趣城、吏民奔走隨之、求得縣令、遂共城守。(中略)度等破走。東阿由此得全。(三國志卷十四 程昱傳)

川勝氏はこの例について、「黄巾の襲来によって無秩序状態に陥った東郡東阿縣城に秩序を恢復したのは、大姓の薛房らと知略の人・程昱との協同によるものであった。……黄巾によってまきおこされた地方の無秩序状態は、郷邑存立の危機を前にして、對立していた大姓と知識人との協同を促した」^⑩とのべている。しかしこの例こそ、黄巾と結んだかもしれない程昱が、秩序維持のために大姓側にまわったなどというのではなく、程昱の黄巾に對する反感を示すものであり、「秩序の恢復」に主導權をとった程昱の體制感覺を示す以外の何ものでもあるまい。

結 び

これまで黄巾と宦官との間になんらかの繋がりのあることを推測し、むしろ知識人＝清流との結びつきの方が可能性が薄いのではないかということをもてきた。であるからといって知識人と黄巾との繋がりをも全く否定するわけではない。川勝氏とはちがった意味での知識人の黄巾への参加はたしかに存在したと思う。というのは、黄巾の宮廷内工作、洛陽の街を舞臺にしたクーデター計劃や宣傳活動、都市と農村に跨る巨大な組織、そしてそれが宗教教團でもあったということ、これらのことは、この集團が農民次元だけのものではなかったことを示している。竹田晃氏は「數十萬の大衆をリードして革命を起こそうとするには、單に人間の頭數をそろえるだけでは動けない。しかるべき經濟的な援助を提供する地主階級と、理論的共鳴者たる知識人や體制内の人たちのバックアップも當然あったであろう」^⑪とのべている。本文でふれた向栩など、あるいはそうした人物の一人かもしれない。向栩が朝廷に徴されたのも、黄巾の本質を見通せなかった時期に、黄巾内の人間として朝廷に迎えられたのかもしれない。これ以外に、どういう知識人が、どういう形で参加したかということをも具體的にのべることはできないが、各地の黄巾軍の指導者で、名前のわかるのを列挙すると、潁川の波才、汝南の彭脫、東郡の卜巳、南陽の張曼成・趙弘・韓忠・孫夏、益州の馬相、それに馬元義、張角、張寶、張梁等であり、彼等の出身階層は全くわからない。ただ黄巾の主流が潰滅したあと、そのあとを受け継ぐかのように活躍した黒山の賊の

指導者がみな、「其の聲の大なる者は雷公と稱し、白馬に騎がる者は張白騎と爲し、輕便なる者は飛燕と言ひ、髭多き者は于氏根と號し、眼の大なる者は大目と爲す。此の如く稱號は各々因る所有」(前出朱儁傳)つたという。アダナで呼ばれたということは、彼等が庶民の出身であつたことを示しているのではないだろうか。このことは黃巾指導者の出身階層を逆に示しているのかもしれない。黃巾主流の潰滅によつて、黃巾集團の指導層も潰滅ないし脱落し、そのあとをうめるようにたち上がった黒山の賊の段階に至つて、農民的反亂集團になつていったのではないかと。

では黃巾段階における知識層と農民を繋ぐものは何だつたのか。私はここに太平教集團の存在を重視したいのである。生きる道を、あるいは現世利益を求める民衆と、そうした現状を踏まえて、塞がれた社會の出路を切り開こうとした人々、この兩者を結び、繋げるブリッジの役割をこの教團が果したのではないだろうか。この宗教は後漢中期にまでさかのぼり、そのころから「太平清領書」という經典をもつていたといわれ、これまでも朝廷に對する働きかけがなされたことがあり、この宗教が單に現世利益的・呪術的とのみでない側面もあるのである。そうした側面を擔うメンバーもいたはずである。その意味で、宦官が自己の勢力の一翼たらしめようと近づくだけの實體は備えていたといえよう。いふなれば、實體が有りすぎたが故に、宦官の迷惑をはるかに越える事態になつてしまつたといえようか。

以上のようなことから、黃巾の活動が農村と都市を繋ぐ、そして宮廷の上層部をもまきこむ、一大反體制運動だつたといふことがわかる。そして靈帝さえもその點では必ずしも手がきれいとはいへなかつた。言葉として、宮廷上層部をも含む反體制運動などというのはおかしいかもしれない。しかしこの時期、體制としての皇帝は名目的には存在していても、内實は無きに等しく、清流系人士の激しい體制維持意識は、逆にそれが彼等の側に移つていつていたことを示しているのではないか。それがあつた過程を経て、貴族制を成立させていくという川勝氏の説は、その意味で正しいと思う。したがつて宦官等の目論見が黃巾の反亂という形で空しくなつた時、急坂をころげ落ちるように後漢そのものが破局に向つていったのは當然のことであつた。黃巾の亂以降、朝廷内部での宦官・何氏一族と何進との對立、何進の朝廷外勢力に對する働

きかけ等が、みな空しい努力にすぎなかったのは當然である。むしろ最後のあがきといった方がよいであろう。少し無謀な推論を加えすぎたかもしれない。また、黄巾と知識人のかかわりを論ずる場合缺かせない、川勝氏のいわれるところの「逸民的人士」に及ばなかった。つぎの機会に待ちたいと思う。

註

① こうした論文の多くについては拙稿「後漢末の宗教的農民反亂」(『駿臺史學』二九號)で紹介した。なお、その時ふれなかつたいくつかの論文の名をつぎに掲げておく。秋月觀暎「黄巾の亂の宗教性」(『東洋史研究』第十五卷第四號) 福井康順「道教の基礎的研究」(『書籍文物流通會』 内山俊彦「漢代思想史における異端的なるもの」3 (『山口大學文學會志』十七卷三號)

② 前記拙稿参照。

③ 「漢末のレジスタンス運動」(『東洋史研究』第二五卷第四號) 四四頁。

④ 多田狷介「黄巾の亂前史」(『東洋史研究』第二六卷第四號) 大淵忍爾「中國における民族的宗教の成立」(『道教史の研究』岡山大學共濟會書籍部 所收) 等。

⑤ ここで一言つけ加えれば、後漢末の農民の位置づけそのものでは、川勝氏の方が高い評價を與えているのである。(『貴族制社會の成立』岩波講座『世界歴史』5 九四—五頁参照)。多田・大淵氏が窮乏農民のやむにやまれぬ反亂とみるのに對し、川勝氏は、この時期の農民を、比較的自立した小農民とみるのであるから、黄巾の反亂は小農民が從來もっていた權利の回復

運動とみているのである。こうした見方から知識人との連合の可能性という視點が出てくるのであろう。たださきにものべたように、農民そのものの、この時點での評價は高いが、後漢末の「レジスタンス運動」の中での農民の獨自性が示されず、知識人運動の中に埋没せられてしまっているという結果になっているのは否定できないのではないか。

⑥ 多田狷介氏も「後漢後期の政局をめぐって——外戚・宦官・清流士人——」(『史學研究』七六 二三—四頁)で疑問を表明されている。ただ本論で論ずるように、私の視點とは少しちがうようである。

⑦ 註④の多田氏の論文。漆俠等著『秦漢農民戰爭史』(生活・讀書・新知三聯書店 一九六二)一四九—一五三頁。漆俠氏のを例にすると、一六〇年代には計八回であるのに、それ以降黄巾蜂起の一八四年までの合計は三回である。

⑧ 中平元年から四年までを靈帝紀から拾い出してみると、中平元年

。交趾屯兵、自稱「柱天將軍」。

。巴郡妖巫張修反寇郡縣。

。湟中義從胡北宮伯玉與先零羌叛、以金城人邊章・韓遂爲軍

帥。

中平二年

。黑山賊張牛角等十餘輩並起。所在寇鈔。

中平三年

。江夏兵趙慈反。

中平四年

。樊陽賊殺中平令。

。扶風人馬超・漢陽人王國並叛寇三輔。

。漁陽人張純與同郡張舉舉兵叛。舉自稱天子。寇幽・冀二

州。

。零陵人觀鵠自稱平天將軍、寇桂陽。

⑨ アンリ・マスベロ著 川勝義雄譯『道教——不死の探究』

(東海大學出版會 一九六六) 一三八頁。

⑩ 註①の内山氏の論文。

⑪ 後漢書列傳卷六一 皇甫嵩傳・三國志卷八 張魯傳及注引

「典略」等參照。

⑫ 「黃巾の亂と五斗米道」(岩波講座『世界歴史』5) 三三三頁。

⑬ 增淵龍夫氏は、竇武と清流との結びつきについて、「大學生

が、自ら激して、竇武を清流の筆頭において、宦官勢力の批

判に奔走することは、……彼らの排斥する宦官勢力にすん

で反撃の名目を與えることであったのであり、自らの清議を

……外戚對官宦の政權争いの中に、すすんで投げ入れること

でもあったのである。そして……反撃はそのような名目をか

り、……あの徹底的彈壓、すなわち第二次黨固がなされたのである」(『後漢黨固事件の史評について』『一橋論叢』四四卷六號 七〇頁)とのべている。

⑭ 東晉次氏は「後漢末の清流について」(『東洋史研究』第三二

卷第一號 四六頁)で、やはり楊賜の言を、清流と黃巾の連帶

の可能性のうすさの一つの證據としてあげている。

⑮ 「帝本侯家、宿貧、每數桓帝不能作家居、故聚爲私臧、復寄

小黃門常侍錢各數千萬。」(後漢書宦者列傳卷六八 張讓傳)

⑯ 註③ 四二頁。

⑰ 同右 四五—六頁。

⑱ 知識人という言葉が、清流の同義語として使用される場合が

多いようであるが、清流に括り切れない知識人もいたという指

摘もあり(註⑬の論文)、また私自身も概念があいまいなよう

な氣持がして、あまり使用したくないと思いつながら、使用して

きてしまった。この論文の中でもその點を最初にきちんとおさ

えておくべきだったと思っている。

⑲ 「曹操——その行動と文學」(評論社 昭和48年) 五九頁。

⑳ 後漢書列傳卷二〇下 襄楷傳參照。

㉑ ストレートに貴族制社會に移行したわけではない。堀敏一

「貴族制社會の成立」(『中國文化叢書8・文化史』大修館、昭

和43年) 一八〇—二頁、「九品中正制度の成立をめぐる——魏

晉の貴族制社會にかんする一考察——」(『東洋文化研究所紀要』

45) 三八頁參照。

Political Aspects of the Yellow Turban 黃巾 Revolt

—Chiefly in Connection with the Eunuchs—

Tsuneko Matsuzaki

Until now the revolt has been regarded as a peasants' revolt, or else it has been studied in its religious aspects. The relation between the revolt and the eunuchs has not yet been investigated, though the latter played an important part in the political situation of the late *Hou Han* 後漢 period. In the historical sources, however, there are quite a few references to the relations between them. Considering the importance of the eunuchs in this period we cannot regard those references as a mere accident. The relations between the revolt and the eunuchs, owing to the character of the sources, are described from the standpoint of the latter. On the other hand, however, the description makes it clear how the Yellow Turban party appealed to the eunuchs and court. It shows that the Yellow Turban revolt, which has been regarded as a peasants' revolt, was a great political movement which included the eunuchs. In this article the author proposes a new conception of the late *Hou Han* period through the analysis of the Yellow Turban revolt, especially in relation to the eunuchs.

The Fang La 方臘 Revolt and the Chi-cai-shi-mo 喫菜事魔 Sect

Masaaki Chikusa

It is commonly accepted that the Fang La Revolt at the end of the Northern Song 北宋 Dynasty was fomented by the *Chi-cai-shi-mo* or Manicheans. No contemporary authorities, however, report that Fang La was a Manichean. On the contrary, his "Yao-shu" 妖術 (*Sorcery*) was influenced rather by Buddhistic methods like those described in the *Chin-ji* 識記 section of the *Bao-zhi* 寶誌 and Ye-jing 業鏡 ("Mirror of